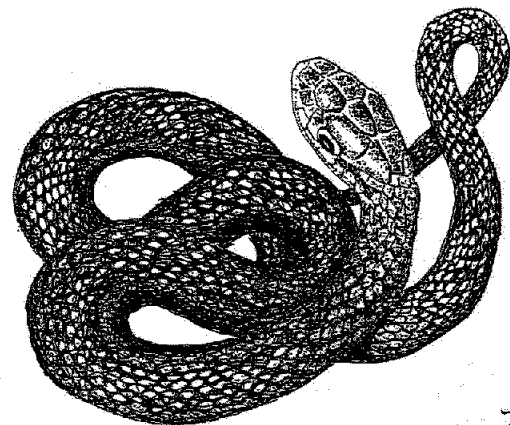
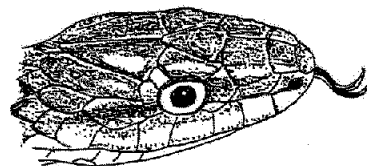
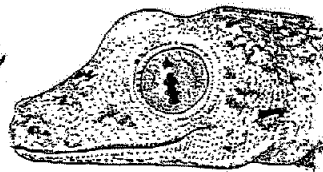




捕獲された爬虫類2種と瞳孔の形状の違い



アオダイショウ (昼行性)



ニホンヤモリ (夜行性)

アオダイショウ 青大将
 (ナミヘビ科)

学名 *Elaphe climacophora*
 英名 Japanese rat snake

4月21日、給食担当の先生が校長室に爬虫類2種を持ってきた。前日に北校舎裏の資材倉庫でヘビとヤモリが出たとの情報を受けて出動し捕獲したらしい。倉庫内とはいえ、目撃された2種をコトゴトク捕獲した技には「やるな!」と感嘆した次第である。捕獲されたのは体長65mmの成体のヤモリと、全長が60~70cmほどの若いアオダイショウだった。ともに4月になって冬眠から覚めて活動を始めたのだろう。アオダイショウにとってやもりは格好のエサである。ひと冬を同じ倉庫で越冬したヤモリはやせ細る思いだったと察するが、思いのほか太っていて元気だった。変温動物同士、寒い冬は動けないので休戦協定中だったのだろう。

アオダイショウは最大2mにもなる日本固有種で、沖縄地方のハブを除くと日本最大のヘビである。郊外の里山だけでなく市街地でもわりと見かけることがある。これはアオダイショウが人家周辺に生息するネズミを餌とするためらしい。また木登りが得意で、樹上や屋根の鳥の巣の卵などを捕食する。腹のうろこの両端が尖っていて、これを樹皮などに引っ掛けてまっすぐに登っていくことができるらしい。身体をくねらせて水面をスイスイ泳ぐのもよく目撃するが、非常に活動範囲が広いヘビである。

かつて我家の周辺には田畑や水路がありカエルや小動物も多かった。そのためヘビも多く見かけた。アオダイショウ、シマヘビ、ヤマカガシの3種類は普通に見られた。庭に小さな池がありカエルなどもいたためか、庭石の下には同じヘビが何年も棲みついていた。洋服ダンスの中にヘビが入り込んでいて、母親がネクタイと間違えて腰を抜かしそうになったという話を聞かされた。家の中に棲むネズミを追ってヘビが入り込んだのだろうか。

ここ30年ほどで高砂市も市街化が進み、周辺のほとんどの田畑が宅地になり、水路も暗渠となってからヘビを見かけなくなった。自然はすっかり多様性を失ってしまった。

1996年にマムシを捕獲したことがある。その時マムシの瞳孔は猫のように縦のスリット状になっていることを知った。その細い瞳はいかにも毒蛇らしかった。しかしアオダイショウの瞳孔はヒトと同じ丸型で愛嬌がある。同じヘビなのにこの違いは何なのか?調べてみると夜行性の動物にはスリット型が多く、そうでないものは丸い瞳孔が多いらしい。スリット型の瞳孔は夜間に大きく開き弱い光を集めやすい、またシャープにピントを合わせて獲物までの距離をつかみやすいという。夜行性で虫を捕らえるヤモリの瞳孔はやはりスリット型である。

大塩海岸潮間帯漂着物調査 ~謎の生物解剖報告~ (ほかに行くところが無い)

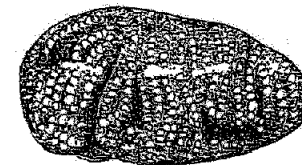


物体A

長径80mm



断面

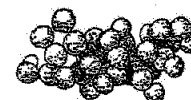


物体B

長径45mm



断面



物体C

球の直径5mm

4月18日、未明に低気圧が通過して強い雨が降り朝方には雷雨となった。かなり強い西寄りの風が吹いていたので、私は播磨灘の潮汐表を調べた。午後3時頃に干潮であるとわかったので、姫路市の大塩の浜に出かけた。私は3月20日、4月12日(先週やんか)にも調査に行っている。浜は強い西風で白波が立っており、予想通り潮間帯のかなり高い場所まで多量のアオサ等の漂着物が打ち上げられている。その中にたくさんのナマコが生干し状態で転がっていた。約1kmの海岸線で推定数百匹にもなるだろう。内臓を吐き出して萎びているものの多くは死んでいる。思わず「モッタイナイ!」と叫んだ。それでも波打ち際で新鮮そうなもの5匹を収穫できた。

豊富な漂着物にワクワクしながら調査して

いると、不思議な物体に出くわした。丸く削られた木片かと思ったが、踏むと少し変形し、ピュッとその一端から水が飛び出した。「こいつは?」と拾い上げた私の眼は

探求に燃え、細い目がさらに細くなる。大きさは10cmほどで重く、どこにも生物らしき特徴が見られない。謎の物体Aとして持ち帰って調べることにした。次に同じように丸くて赤い石のような物体Bを見つけた。砂を払ってよく観察すると表面に小さな赤い粒状の模様が並んでおり、押すと凹んだ。「むむっ、怪しいやつ!」私の細い目がさらに陰しくなる。どうも石ではないようだ。謎の物体Bも持ち帰る。辺りにはAやBらしきものがアオサにまみれて10個以上も転がっている。さらにアオサをほじくると、魚卵のような透明な丸い物体が房状に集まっているのを見つけた。こいつも謎の物体Cとして持ち帰る。

帰宅後すぐに家の庭の水道で物体を洗って解剖する。OIFAの大型カッターで真ん中にざっくりと切り込んだ。物体Aは断面が白い硬い組織で包まれているが、中に透明や赤や黄色のゼリー状の内臓器官らしき組織が入っていた。その構造はホヤの仲間によく似ている。物体Bも切ってみたが、ゼリー状の半透明の物質が詰まっており、その中に白い紐のような組織が放射状に表面に向かって無数に並んでいる。以前、高砂市北部の池で見つけた「オオマリコケムシ」に似ている。「こいつはコケムシの仲間には違いない、図鑑で似たのを見た記憶がある!」と家中の図鑑を調べたが記載がなかった。私の記憶って...

物体Cは、ざらついた薄い褐色の皮膜に被われた透明な球体で、これが多数くっついていて。どう見ても卵のようだがよくわからない。こうなったら最後に頼るのは博物館である。さっそく姫路市立水族園に調査協力を依頼したので、わかり次第報告したい。

なお、同時に見つけた謎の物体Dは、全体が赤く先端部に目のようなものが1対あり他端には触手様の器官がある。タコに似るが材質は石油系ゴムで、自然に分解されず徐々にマイクロプラスチック化すると思われる。



物体D 全長55mm